

女、医師の家に行き瘡を治して逃げたる語（今昔物語集卷二十四第八）

今は昔、典薬頭にて□□□といふやむごとなき医師有けり。世にならびなき者なりければ、人皆この人を用たりけり。

しかる間、この典薬頭に、いみじく装束したる女、車の乗衣装をのぞかせているこぼれたる入る。頭、これを見て、「いづくの車ぞ」と問ひぬれども、答へもせずして、只遣りに遣入れて、車を搔下して、車の頸木を蒔の木に打懸て、雑色共家来は門の許に寄て居ぬ。

その時に、頭、車の許に寄て、「これは誰がおはしましたるにか。何事を仰せられにおはしましたるぞ」と問へば、車の内にその人とは答えずして、「しかるべからむ所に局部屋を留意しして下し給へ」と、愛敬付きをかしき気はひにていへば、この典薬頭は本よりすきずきしく、心をひかれやすいものめでしける翁にて、内に角の間の人離れたる所を、俄にわかに掃浄めて、屏風立て、畳敷などして、車の許に寄て、しつらひたる由をいへば、女、「然らばのき給へ」といへば、頭、のきて立るに、女、扇扇で顔を隠してを差隠して居り下りぬ。車に「共の人乗りたらむ」と思ふに、また人乗らず。女、下るままに、十五六歳許なる樋すましの女の童ぞ車の許に寄来て、車の内なる蒔絵の櫛おまるの篋取て持来ぬれば、車は雑色共寄りて牛懸けて飛ぶが如くにのき去りぬ。

女房、しつらひたる所に居ぬ。女の童は篋の櫛を裹て隠して、屏風の後にかがまり居ぬ。その時、頭寄りて、「こは何なる人の何事仰されむぞ。とく仰せられよ」といへば、女房、「こちいり給へ。恥恥ずかしくはありません聞くまじ」といへば、頭、簾の内に入りぬ。女房差向ひたるを見れば、年三十ばかりなる女の、頭付きより始めて、目・鼻・口、ここはわろしと見ゆる所なく端正なるが、髪いみじく長し。香かうばしく、えならぬ衣共を着たり。恥かしく思たる気色も無くて、年来の妹などの様に安らかに向ひたり。

頭、これを見るに、「希有にあやし不思議」と思ふ。「何様にてても、これは我が進退意のままになるにむずる者なめり」と思ふに、齒も無くいみじくしてしほめる顔をいみじくゑみて、近く寄りて問ふ。況や頭、年来の嫗共長年の老妻失せて三四年に成にければ、妻も無くてありける程にて、うれしと思ふに、女のいはく「人の心のうかりける事は、命の惜しさには、万の身の恥も思はざりければ、『只いかならむわざをしても命をだに生きなば』と思へて参り来つるなり。今は生けむも、殺さむも、その御心地なり。身を任せて聞へつれば」とて、泣く事限りなし。

頭、いみじくこれを「哀れ」と思て、「いかなる事のさぶらふぞ」と問へば、女、袴の股立ももたちを引開て見れば、股の雪の様に白きに、少し面腫おもはれたり。その腫、すこぶる心得ず見ゆれば、袴の腰を解かして、前の方を見るに、毛陰毛の中にて見へず。然れば、頭、手を以つてそこを搜れば、あたりにいと近く腫れたる物あり。左右の手を以て搔き別けて見れば、専らに

危険な腫瘍。瘡にこそありければ、いみじくいとほしく思ひて、「ベテランの年来の医師、只この功に、秘術を取り出すべきなり」と思て、その日より始めて、たすきあげ自ら禪上をして、治療夜昼つくろふ。

七日ばかりつくろひて見るに、よくいえぬ。頭、いみじくうれしく思ひて「今暫くはかくて置きたらむ。どこの誰とその人と聞きてこそ返さめ」など思ひて、今はひやす事をば止めて、ちやわんの器に、何薬にてかあらむ、摺り入たる物を、鳥の羽を以て日に五六度付くばかりなり。

「今は事にも非ず」と、頭のけはひもうれし氣に思ひたり。

女房のいはく、「今、あさましきあり様をも見せ奉りつ。属性偏におやとたのみ奉るべきなり。

然れば、掃宅返らむにも、御車にて送り給へ。その時に、素性そとは聞へむ。亦、こにも常に詣で来む」などいへば、頭、「今四五日許はかくて居らむ」と思て、油断したゆみである程に、夕暮方に女房宿直物の薄綿衣一つ許を着て、この女の童を具して逃げにけるを、頭、ことも知らず、「夕の食物参らせむ」といひて、盤に調へすゑて、頭自ら持て入ぬるに、人も無し。「只今、用便中然るべき事構へつる時にこそはあらめ」と思て、食物を持ち返りぬ。

しかる程に暮ぬれば、「先ず火ともさん」と思て、火を燈台にすゑて持ち行きて見るに、衣共を脱ぎ散らしたり。櫛の篋もあり。「久く隠れて屏風の後に何態為るにかあらむ」と思ひて、「かく久しくは何態させ給ふ」といいて、屏風の後を見るに、何しにかはあらむ、女の童も見へず、衣共着重ねたりしも、袴もさながらあり。只、宿直物にて着たりし薄綿の衣一つばかりなむ無き。「いなくなつたのだらうかなきにやあらむ。この人はそれを着て逃げにけるなめり」と思ふに、頭、胸塞りて、せむ方も無く思ゆ。

門を差して、人々あまた手毎に火を灯して家の内をあさるに、何にしにかはあらむ、無ければ、頭、女のありつる顔・あり様、面影に思へて、恋しくて悲しき事限り無し。「忌まずして、本意をこそ遂ぐべかりけれ。何にしにつくろひて忌みつらむ」と、悔しく妬くて、されば、「まじ無くて、憚るべき人も無きに、女が人の妻などにてあらば、妻にせずといふとも、時々密会しても物いはむに、いみじき者まうけつと思ひつる者を」と、つくづくと思ひ居たるに、かく謀られて逃しつれば、手を打て妬がり足摺をして、ひどいいみじ気なる顔に貝を作て泣ければ、弟子の医師共は、ひそかにいみじくなむわらひける。世の人々も、これを聞てわらひて問ければ、いみじくいかりあらそひける。

思ふに、いみじく賢かりける女かな。遂に誰とも知られで止みにけりとなむ語り伝へたるとや。